

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

(1) 授業づくり

授業者だけでなく大勢で、一つの授業について考えるための「授業づくりアイデアシート」を作成し、その教材ならではの「ねらい」や思考を刺激する発問などを考えるようになった。また、授業の前に「翼話し合いチャート図」を作成し、子どもの考えや補助発問を想定して授業に臨むようになった。

(2) 話し合いの土台づくり

朝の15分の帯時間を使い、「翼トークタイム」の実践を行った。話し合いを行うために必要とされる自分の考えを話すことや仲間の考えを聞くこと、異なる意見を受け入れる態度を養うことができた。

(3) 家庭との連携

「道徳ノート」を作成し、年3回「親子道徳の日」に持ち帰らせた。保護者は、道徳科の授業内容や自分の子どもの考えについて知り、興味ある内容について親子で話し合うことができた。戻ってきたノートからは家庭での様子が分かり、子どもの心の在り方や行動について、学校と家庭で共有できた。

1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数	備考
高浜市立翼小学校	高浜市神明町五丁目1番地1	0566(54)2831	730人	

2 研究課題

(1) 考え、議論する道徳を目指した発問、繰り返し等の教師の出しの工夫や指導方法の研究

- ① 外部講師を招聘した計画的な授業研究を行い、授業における発問や教師の言葉、教材の提示の仕方など道徳の授業方法について研究する。
- ② 思いや考えを伝え合い、授業で必要な「話す・聞く」力を養うためのトークタイムを設定する。
- ③ 子どもたちが、人間としての在り方や生き方等について感動を覚えたり、多面的・多角的に考えたりできるような教材の研究をする。
- ④ 子どもたちの話し合いをファシリテーションする方法を考える。

(2) 子どもたちが自らの成長を実感し、これからの自分の生き方に生かすような振り返りと、道徳科の評価方法の研究

- ① 子どもたちの考えの変容が分かるワークシート（低学年）や道徳ノート等を工夫する。
- ② 蓄積された学習記録から道徳性の向上を見取るための評価方法を明確にする。

(3) 道徳科の授業公開や「親子道徳の日」の設定、地域に生活する外部講師を招いた道徳科の授業実践を行い、家庭や地域との連携を推進する。

- ① 「親子道徳の日」に家庭に持ち帰る道徳ノートの在り方を研究する。
- ② 地域の方を招聘したり、実物を提示したりするなど、教材の生かし方を工夫をする。
- ③ 道徳の授業及び道徳教育について、その内容や様子を家庭や地域へ発信して連携を図る。

3 研究主題とその設定理由

(1) 研究主題

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
－「考え、議論する道徳」の実現－

(2) 主題設定の理由

本校では、校歌に示されている「未来に羽ばたく翼を自分で育てる」を目指す子ども像と位置付け、職員の共通理解のもと、あらゆる教育活動の中で、子どもの主体性を育てている。昨年度からは「あいさつ・返事・思いやり・みんなをおうえん」を合い言葉に、日常の学校生活の中でこれらを意識さ

せる活動に意図的、継続的に取り組み、活気ある環境づくりを推進している。

本校は、開校から18年目の学校で、学区は新興住宅地と県営や市営住宅などが中心で、共働きや一人親家庭が多い。地縁の結びつきが少ない学区のため、本市に学区ごとに設けられている「まちづくり協議会」やPTA役員OBで運営する「飛翔の会」の活動等を通して地域文化の形成途中である。転出入も多く、全校児童の1割を外国籍児童が占め(日本語指導教室2クラス)、子どもたちは様々な環境や文化の下に育った仲間と生活している。

本校の最近の主題研究においては、「特別の教科 道徳」への移行期間から「人との関わりの中で、よりよく生きようとする子の育成」をテーマに道徳科における効果的な指導方法の工夫と評価の方法について進めてきた。仲間との関わりを大切にしたい手立てを講じ、道徳の時間を中心として、各教科、総合的な学習の時間、特別活動、行事等とも関連を図りながら学校教育全体を通して道徳教育に取り組んできた。

しかし、地域に生活する外部講師を招聘したり、本校の道徳教育の取組を家庭や地域に発信したりすることはほとんどなく、授業参観で道徳の授業を公開しているものの、家庭・地域との連携という点では十分とは言えなかった。また、これまでの研究実践から子どもたちは自分の考えをもったり、立場を決めたりすることができるようになってきているが、異なる意見に対して自分の考えと比較したり、様々な考えを統合して新たな考えを創造したりするまでには至っていない。

そこで、これまでの研究を生かしつつ、指導方法を工夫することで教師の授業力向上を図る。家庭・地域との連携を進めるため、道徳的価値や実践の仕方について親子が家庭で話し合うことを目標とした取組についても、新たに研究・実践を重ねていく。新学習指導要領の趣旨を踏まえ、「考え、議論する道徳」へと質的に転換を図るため、道徳科における効果的な指導方法と評価の工夫、及び家庭・地域との連携の在り方について以下を研究のねらいとすることとした。

- 道徳科の授業の工夫や改善を図ったり、多様な指導方法を模索したりして、教師の授業力向上を図る。経験年数の多少に関わらず、道徳科の授業に対して意欲的に取り組めるようにする。
- 他の教科の指導や学校行事の中にも道徳の内容項目を意識した言葉かけをし、学校全体で本校の目指す子ども像や合い言葉の姿に向け、子どもたちの思いやりの心を育てたり、自律的に判断し、よりよい生活を送ったりすることができるようにする。
- 仲間との関わりや活動の振り返りから自分の成長や個性について自覚させ、子どもたちの自己肯定感を高める。
- 「親子道徳の日」を通して、学校で行っている道徳教育を保護者に知らせ、学校と家庭の連携強化を図りながら子どもたちの道徳性を高める。

4 研究の概要

(1) 研究の仮説

- ① 仲間との話し合いを大切にしたい展開や、教材への関心を高める導入などを工夫することで、主体的に自分との関わりを考え、自分の生き方について考えを深める子どもに育つだろう。
- ② 子どもたちが自分の成長に気付いたり(自己評価)、仲間との関わりから深く考えたり(相互評価)、保護者と話し合ったり(他者評価)することで、自分を見つめることができ、よりよく生きようとする子どもに育つだろう。

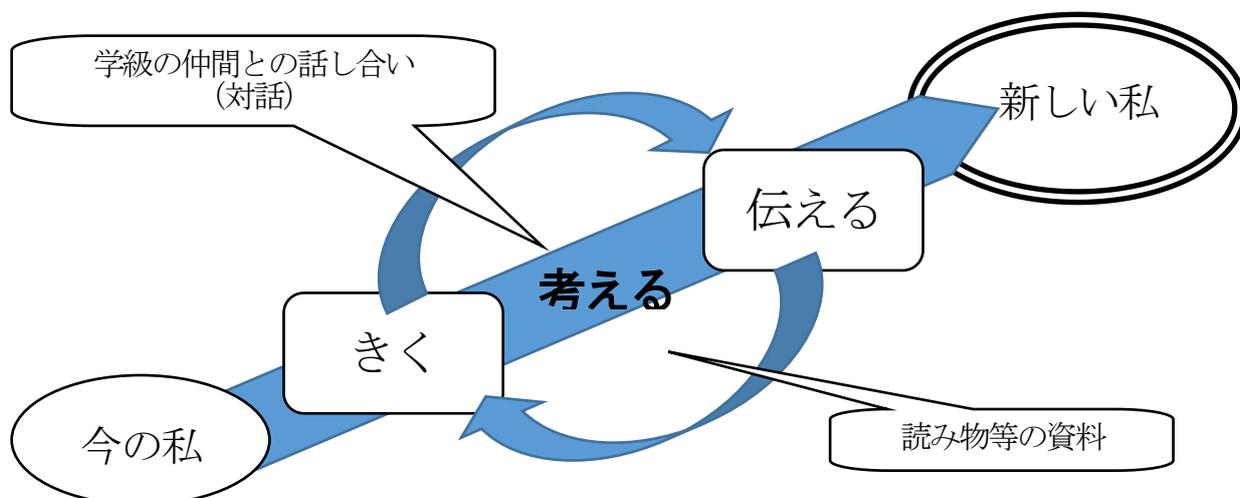
(2) 手だて

- ① 多様な考え方を受容する態度と根拠をもって話す力を養い、話し合いの土台をつくるため、週に1回「翼トークタイム」として、テーマに基づいて仲間と話す時間を設定する。
- ② 道徳科の時間での話し合いをファシリテーションしていくため、教師の補助発問や子どもたちの発言を予想して図に表した「翼話し合いチャート」を作成する。
- ③ 子どもたちが主体的に授業に参加するための教材への興味をもたせ方や、子どもたちの考えを引き出す主発問を検討する。

- ④ 子どもたちの考えの変容がたどれる振り返りを行ったり、どんな授業だったかが分かる写真を貼ったりした道徳ノートについて検討する。
- ⑤ 学校と家庭の連携強化を図るため、「親子道徳の日」を設定して道徳ノートを家庭に持ち帰らせ、家庭で授業内容について話し合う機会をつくる。
- ⑥ 地域に生活する外部講師を招聘して、地域の人材を生かした授業づくりをすることで多様な指導方法を模索する。

(3) 授業での基本的な考え方

対話を軸とした学習展開を行う中で、教師の切り返しや補助発問などの働きかけを工夫・改善することで、子どもたちが自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにする。対話を通して、仲間との関わりから深く考えたり、考えを広げたりしたことを振り返ることで、子どもたちが自分を見つめ直し、新たな自分に気付くことができるようにする。



5 研究計画

月	実施内容	講師・指導助言
4	<ul style="list-style-type: none"> ・主題研究の方針・重点目標の設定・研究の手だて等検討 ・「親子道徳の日」の設定 ・一年間で育てたい、高めたい学年重点目標について 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・翼トークタイムについて 	
6	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳教育推進教師による授業公開の実施 ・研究主任による研究授業(6年)の実施 ・「親子道徳の日」の実施(6/19~26) ・児童と教師への道徳アンケートの実施 	
7	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に生活する外部講師による講話(6年生対象) ・講師による研究授業(3年)の実施(全体授業と研究協議会) ・道徳科の目標と評価について講話<外部講師による現職教育研修> 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域講師 ・愛教大教授 ・他校小学校教務
8	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程参加者(研究主任)による伝達講習 ・年間指導計画および別葉の見直し 	
9	<ul style="list-style-type: none"> ・講師による研究授業(2年)の実施(全体授業と研究協議会) ・講師による現職研修の実施(問題解決的な学習の進め方) 	<ul style="list-style-type: none"> ・愛教大教授 ・三重大特任教授
10	<ul style="list-style-type: none"> ・小中合同授業研究(5年)(講師招聘による研究授業) ・授業参観:全クラス道徳の授業で公開 ・「親子道徳の日」の実施(10/18~31) ・愛知県道徳教育推進会議委員の訪問(全クラスで道徳の授業公開) 	<ul style="list-style-type: none"> ・他校小学校教務

1 1	<ul style="list-style-type: none"> ・学年研究授業（5年） 教材名「ケンタの役割」 ・学年研究授業（4年） 教材名「雨のバス停留所で」 ・地域に生活する外部講師による講話と実習（3年生対象） 	・地域講師
1 2	・研究の成果と課題のまとめ作成	
1	<ul style="list-style-type: none"> ・児童と教師への道徳アンケートの実施 ・保護者アンケート実施（学校関係者評価委員会による） ・「親子道徳の日」の実施（1/17～31） ・講師による研究授業（1年）の実施（全体授業と研究協議会） ・地域に生活する外部講師による講話（4年生対象） 	<ul style="list-style-type: none"> ・愛教大教授 ・地域講師
2	・研究のまとめ	
年間	・一人一公開授業	・市教委指導主事

6 研究課題に関わる取組

(1) 翼トークタイム

4月から朝の15分の帯時間を使い、話し合いの土台を作るための「翼トークタイム」の実践を行ってきた。テーマに対し、思いや考えを伝え合うことで、話し合いを行うために必要とされる基礎的な聞く力や話す力を育てることをねらいとしている。また、どの子どもも思い思いに発言できるような雰囲気づくりや自分と異なる考えに対する受容的な態度の形成もできると考えた。

テーマの内容には、子どもたちの親しみやすい食べ物や生活に関わる二者択一のテーマや時事問題などから担任の考えで選んでいる。学年が上がるにつれて、ニュースに取り上げられていることや判断に迷うことなど、15分で話し合いが終わらず、次週へ続くことも出てきた。教師は、話し合いに臨むにあたり、子どもの相手の顔を注視して話を聞いたり、自分の考えを理由付けて話したりする姿に注目し、ほめたり認めたりするよう心がけた。正解にこだわらない思い思いの発言ができる場を設定したことで、授業中にあまり発言しない子どもが発言したり、次回のテーマを提案したりする子どもが出たりしている。

(2) 翼話し合いチャート

教材研究を行う中で、授業をどのように展開していくのかを考えることが重要になってくる。そのため、子どもの発言やつぶやきを教師がより共感的に受け止められるようになることをねらって実践を行った。「翼話し合いチャート図」（授業研究のページに掲載）とは、時系列に沿って、子どもの発言や教師の切り返し、子どもの思考をより深めていくための補助発問などを記入し、それらが他の意見とどう関わっていくのか矢印などで関係を示していく図である。日常の授業では、どのタイミングで補助発問をすることが有効になるのか、対立しそうな意見はどれかなどを付箋に書いて操作しながら授業の流れを考え、チャート図を作成した。付箋を操作することで授業者以外の教師と協力して授業を検討することが容易になり、より子どもたちの学びが深まるためのアイデアを出し合うことができた。

(3) 授業研究

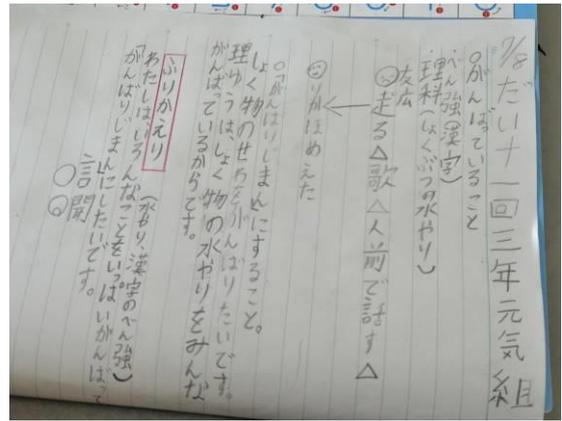
① 3年生（7月8日）

<主題名> それぞれのよいところ 教材名「三年元気組」
 <ねらい> クラスの仲間の言葉から自分の長所を見つける友広の姿を通して、自分の特徴に気づき、長所を伸ばしていこうとする意欲を育てる。

子どもたちが主体的に授業に参加できるよう、体験的活動を取り入れることにした。本教材と同じような「がんばりじまん」を発表する場を夏休み前の学年集会に設けた。また、周りの人によって長所に気付くことができることを実感させるため、班で相手の「がんばっているところ」を伝え合う活動を本時の展開に入れた。そして、授業の終末に、「これから自分の長所にしていきたいこと」「長所にするためにできること」を考えるときに、行動に移そうと思えるような具体性をもたせられるよう

に、「今日から何をしますか」と問いかけるようにした。

授業では、グループでお互いの「がんばっているところ」を伝え合う場面で、相手が自分で意識して取り組んでいたことのほかにも、自分では意識したことのなかった授業を受けるときの態度を認めたり、毎日の掃除に対する姿勢を褒めたりする姿が見られた。ふだんあまり意識していなかったところも「がんばり」として伝えられた子どもは、照れくさそうにほほ笑み、人に認められる喜びを味わっていた。周りの人との対話を通して自分のよさに気付くことができると実感できていた。



また、今がんばっていることのほかに、その前段階である「好きなこと」にも目を向けた。サッカーなどの熱中しているスポーツや、大好きな花と触れ合うことなど好きなことがいくつも挙がり、これから長所にしていきたい、自分の長所を増やしていきたいという意欲の高まりが感じられた。

後日談として、家での取組を伸ばして長所にしたいと考えた子どもが、行動に移せたか実際に様子を見ることはできないが、10月の「親子道徳の日」の親からのコメントで、本実践を受けて家での様子を詳細に伝えるものがあった。また、手伝いをはじめ、家での行動が変わったと感じている親もいた。親からも肯定的な言葉をかけてもらい、子どもが自身の成長を実感することができた。

<研究協議会で出された意見>

- ・自分だけでなく、人のよいところを積極的に発見する子どもの姿が見られた。
- ・あらかじめ友達のよいところを書かせていけば、多くの視点からの長所が出たかもしれない。
- ・伝え合い方の工夫が必要

○鈴木健二先生（愛教大教授）による指導

★授業づくりのための基礎基本

- ・その教材ならではの「ねらい」を設定する。
- ・思考を刺激する発問を工夫する。
- ・教材に興味をもたせる（問題意識を高める）。
- ・身近な問題として意識付ける。

★道徳の授業で大切にしたいこと

- ・子どもの認識の変容を促す授業をすること
→「そういうことだったのか」という思いを引き出すことが「新たな認識」や「深まった認識」を促し日常的な場面での言動の変容を生み出す。



◎今後の指導案作成時に「授業づくりアイデアシート」を活用することにした。

②2年生（9月10日）

<主題名> よいことをすすんで 教材名「教室でのできごと」
<ねらい> 間違った行動に対してどうすればよいかを考えさせ、相手の気持ちを考えながら、よいと思うことを勇気をもって進んで行おうとする心情を育てる。

本実践では、5枚の漫画と3か所の「わたし」の内心語で構成されている教材について、推進委員全員が「授業づくりアイデアシート」に自分の考えを記入した上で、どのように教材を読み取るか話し合った。自分の気持ちを言葉で表せない現状があるので、子どもたちが主体的に授業に参加できるように、気持ちの揺れや迷いを表すための心情円盤と役割演技を取り入れて授業づくりを進めた。また、話し合う活動を中心とした授業の展開を行うため、話し合う前には、自分の考えをもつ時間を設定し、グループ・全体へと話し合いの場の段階を踏むことで、道徳的価値の理解の広がりや深まりを

授業づくりアイデアシート

感じさせようと考えた。

授業では、導入場面で教材を自分のこととして考えやすいように、ドラえもののキャラクターを例にあげて、「友達がいけないことをしていたのを見たらどうするか」を考えさせた後、紙芝居形式で教材の内容を確認した。

『わたし』はこの後どうすると思いますか」という発問を、心情円盤を用いて「何か行動する」「何もしない」を表せるようにして考えさせた。これにより、自分の中にもある「何もしない」という気持ちに気付けることをねらいとした。子どものほとんどが「何もしない」の気持ちを、多少の差はあったが、円盤上で表すことができた。

<研究協議会で出された意見>

- ・教師にやりたいことがいくつもあると時間内に収めるのが難しい。焦点化する。
- ・心情円盤の使用場面が適切であったか。二者択一になりがちなどどちらの行動するのかを問うではなく、気持ちの揺れ幅が大きい場面で有効ではなかったのか。

○鈴木健二先生（愛教大教授）による指導

★今日の教材でないとならえないのは何かについて検討したい。教材を批判的思考で読んだり、テーマを深く掘り下げたりして、その教材で一番考えさせたいことを焦点化する。

★教材に興味をもたせるために、主題名、教材名、イラスト、教材に出てくる言葉にこだわるとよい。核心に意識がもてるような導入を考えたい。

★子どもたちの認識をどう変えたいのか、授業の質を高めていく時期である。

③5年生（10月10日）

<p><主題名> 自分の心に誠実に 教材名「千羽づる」</p> <p><ねらい> みなみの「だまっていれば分からないと思うのに、悩んでしまう気持ち」を考えることで、嫌なことを嘘でごまかしても明るい気持ちになれないことや、人の気持ちを裏切っていることに気付いている状態は心が苦しいだけであるということに付き、責任感や真心、正直であることの大切さを感じながら、すがすがしい気持ちで生活していこうという心情を養う。</p>
--

本実践を行うにあたって、3回の先行授業を行った。「核心に意識がもてるような導入」と「教材で一番考えさせたいことの焦点化」について模索しつつ、学年部会が中心となって授業研究を進めた。

<先行授業1>

日常生活のすがすがしい気持ちを思い出させ、もやもやした気持ちと対比させるところを導入にした。「テストで100点取れたとき」「掃除の後」「勝ったとき」などの意見が出た。すがすがしい気持ちからイメージされる場面が、教師の意図する考えから外れてしまったので、導入と考えさせたい

名前	
教材名	教室でのできごと
1	その教材ならではの「ねらい」 花瓶を割った友達を見かけたとき、どんな言葉をかけるとよいか考えさせ相手を思いやる心を育てる。
2	教材に興味をもたせる（問題意識を高める） 吹き出しをすべて隠して漫画を見せたり、漫画の順序を変えて見せたりする。
3	思考を刺激する発問づくり ① わたしはどうして花瓶を割ったゆかちゃんに声をかけなかったのかな ② わたしがわったわけでもないのに立ち去るゆかちゃんから見つからないようにしているのはなぜだろう。 ③ ゆかちゃんは花瓶を割ってしまったときどんな気持ちだったのかな。 ④ ゆかちゃんに教えてあげたいのはどんなことかな。
4	身近な問題として意識づける ゆかちゃんに話しかけるとしたら何というのか考えることで、実際に自分だったらどうできるのか身近な問題として捉えられるようにする。
5	そのほかのアイデアを書く（関連する資料、意識を継続させる方法など） 花瓶の割れる音を流したり、実際に花瓶を用いてみせることで子どもの意識を内容に引き込む。

このシートはあくまでも指導案を考えるときに使うものとして扱います。指導案につくなくていいです。



ことがつながらなかった。また、教材を読んで内容を確認することに時間がかかってしまい、主発問について話し合う時間が短くなった。

＜先行授業2＞

考えさせたいことを絞るため、もやもやした気持ちから問うことにした。もやもやした気持ちとすがすがしい気持ち、どっちの気持ちで生活したいかを尋ねた後、子どもたちが選択したすがすがしい気持ちで生活していくために大切なことは何かを考えさせた。あらすじをつかませるために場面を限定して教材について確認したが、やはり時間がかかった。主発問の言葉については、教師の予想した言葉、気付いてほしいことは出てきたので、次の授業では変更しないことにした。授業の終末、嘘が誰にでも経験のある身近な問題であることが分かるように「嘘をついた経験」の事前アンケートの結果を提示したところ、振り返りの場面で一気に「嘘をつかないようにする」ことに考えが流れてしまった。次の授業では事前アンケートはとらないことにした。

＜先行授業3＞

授業の前に、はばたきタイムを使って「誠実に生きるために大切なこと」を考えたり、教材を読んで内容を理解しておくことを取り入れたりした。導入では後ろめたい気持ちを思い出させたが、核心に意識がもてるような導入とはならなかった。全体授業では、発想を変えて、千羽鶴を折ったことがある経験と、教材の漫画の一コマにある主人公の表情を導入に用いることにした。この授業では、主発問に対する考えを全体で話し合う前にグループで意見交換する時間を設けた。友達の考えを聞いて新たな考えが生まれ、グループ内では発表していない意見を全体の場で発表する子どもの姿が見られた。

＜小中合同研究授業＞

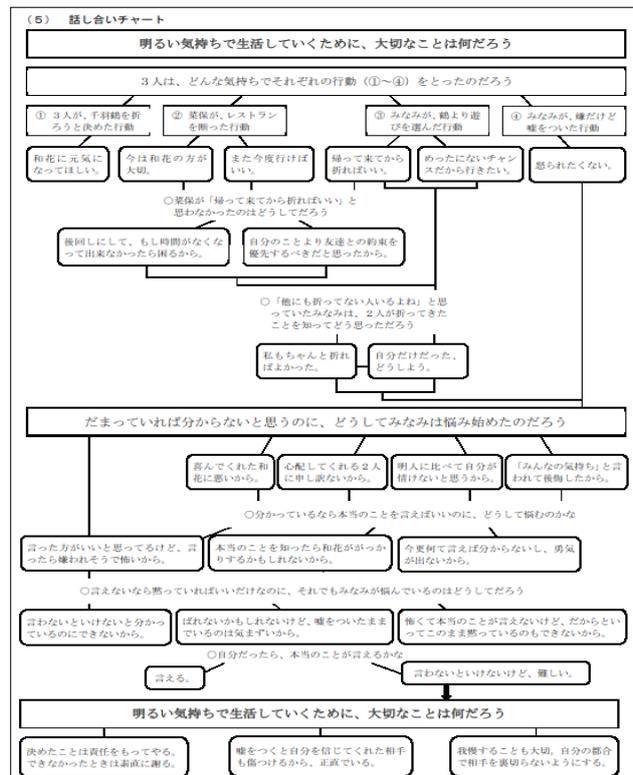
右にある「話し合いチャート図」での想定どおりに授業は展開していった。導入の場面では、子どもたちが、前年度、6年生を送る会で折り鶴をプレゼントした経験から、核心に迫る千羽鶴に込められた思いを共有し、学習に臨むことができた。また、授業者が前年度6年の担任で、子どもたちがもらう側の気持ちや思いも知ることができ、学習に取り組む意欲を高めることができた。主発問では、主人公が黙っているのか、正直に言うのか悩んでいることに対して、子どもたちは、それぞれの行動をとった結果、どのような気持ちになるのか考え、「正直に言いたいけれど、怒られるのは嫌だから言わない」などと本音を交えながら語ることができた。さらに、補助発問や切り返しを活用しながら、子どもたちに自分事として捉えさせることができた。終末の振り返りでは、授業の中で出た発言や意見、自分の考えを基に、これからどうしていきたいのか考えることができた。

④1年生（1月23日）

＜主題名＞ 友達のことを考えて 教材名「二わのことり」

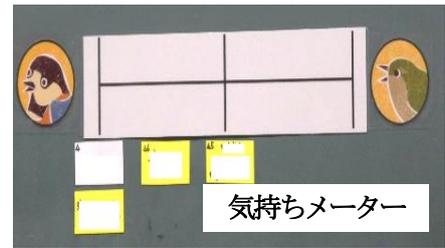
＜ねらい＞ やまがらを思いやるすずめの心情と行動について考えることをとおして、友達を思って行動することのよさに気付くことができる。

子どもが身近な問題として意識付けできるように、導入で「友達のためにしてよかったこと」終末



で「これから友達のためにしたいと思うこと」を問いかけるようにした。また、基本発問や主発問を考える際、登場人物の気持ちを考えやすいように気持ちメーターを使った。

授業では、気持ちを考えたり、全体で発表したりすることが苦手な子どもでも、気持ちメーターで印をつけることでその人物の心の状態を説明しやすくなることができた。また、友達の意見も、言葉だけではなく視覚的にも理解しやすかった。子どもは、すずめの立場に立って想像することで、友達なのに呼ばれた誕生日会に行かなかったことを後悔したり、誕生日会に誰も来ていないだろうやまがらのことを思うと、心配になったり楽しめない気持ちになったりすることに気付くことができた。終末の「これから自分はどうしていききたいかな」という問いかけに対して、今の自分を振り返り、目標とする姿を1年生なりの言葉で記述していた。



<研究協議会で出された意見>

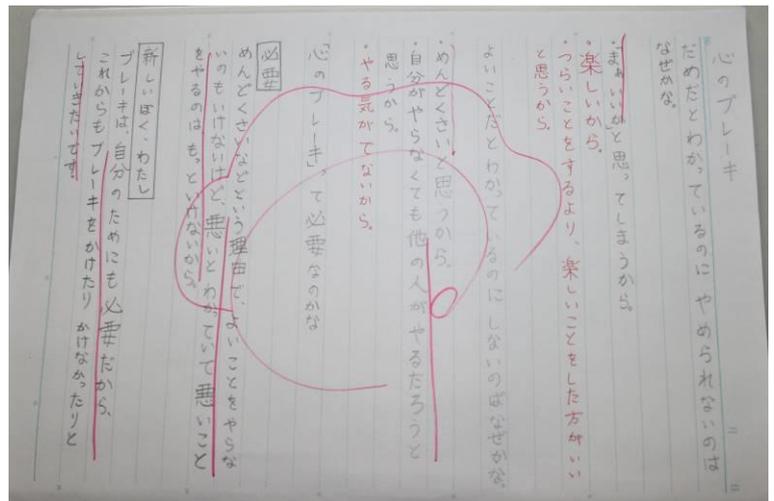
- ・なぜ楽しくないのかを問う場面で、授業者が誰のことを考えているのかと言ったので、気持ちメーターに揺れがなくなった。子どもに投げかける言葉を大切にしたい。

○鈴木健二先生(愛教大教授)による指導

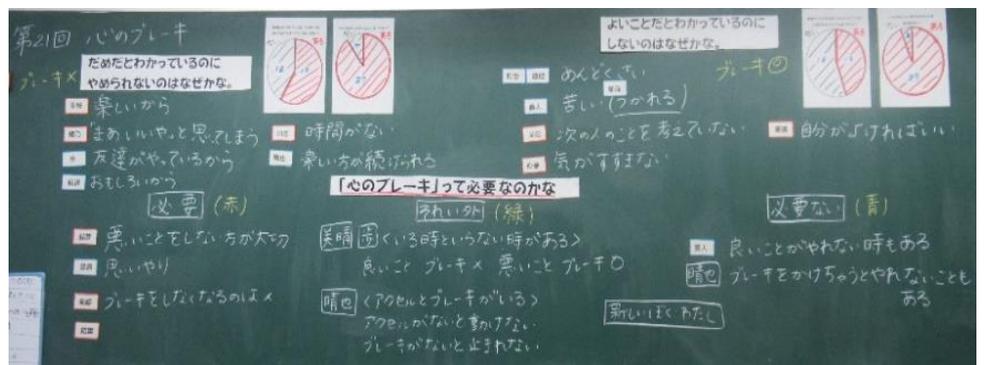
- ★子どもが知っていることを問うだけになっていないか、思考を刺激する発問を考えたい。
- ★グループで話し合ったことが、次の展開にどう生きたのか、活動をする意義を考える必要がある。

(4) 道徳ノート

これまでの本校の道徳科の授業では、あらかじめ主発問や何を振り返るかが書かれているワークシートを使うことが多かった。ワークシートを配付すると、授業がどう展開していくのか予想できてしまい、ワークシートの展開に沿った発言をする子どももいた。今年度は、道徳科の授業でクラスの仲間と話し合ったことを家庭でも話題にしてもらったり、どんな授業をしているのかを知らせたりすることも考えて、3～6年では「道徳ノート」を用いることにした。



縦書き横書きの形式は自由とした。子どもが1時間で考えたことを記入したノートに授業の様子が伝わる板書の写真を貼り、年間3回設けた「親子道徳の日」に家庭に持ち帰るようにした。ノートを用いたことで書く量に制限がなくなって思いのまま書けるようになったり、話し合いで聞いた仲間の意見をノートに書き留めることができるようになったりした。さらに、以前学習した内容を確認しながら振り返りを書く子どもの姿も見られ、自分の考えを見つめ直しながら考えを深めることができた。子どもの変容が蓄積された道徳ノートは、評価をするときの強力な参考資料となる。授業中には表出されなかった子どもの考えをノートの記述で見取ることができた。



たことで書く量に制限がなくなって思いのまま書けるようになったり、話し合いで聞いた仲間の意見をノートに書き留めることができるようになったりした。さらに、以前学習した内容を確認しながら振り返りを書く子どもの姿も見られ、自分の考えを見つめ直しながら考えを深めることができた。子どもの変容が蓄積された道徳ノートは、評価をするときの強力な参考資料となる。授業中には表出されなかった子どもの考えをノートの記述で見取ることができた。

(5) 家庭・地域との連携

① 「親子道徳の日(19日)」

「親子道徳の日」を設定し、親子で道徳の授業について考える機会をつくることで子どもたちの行動の仕方や心の在り方について家庭で話し合うことを推奨した。道徳ノート(低学年はワークシートと板書写真を綴じたファイル)を家庭に持ち帰らせ、保護者に感想や子どもへの励ましのコメントをお願いした(右枠内参照)。10月の授業参観日には、全クラスで道徳の授業を公開して保護者と授業内容を共有し、家庭での話し合いがより深まるようにした。3回の持ち帰りで、半数以上の保護者からコメントをいただいた。

.....「親子道徳の日」とは、持ち帰った道徳ノート(低学年はワークシート)やお子さんとの対話を通して、学校で行った道徳の授業の中で子どもが学んだ心の在り方やこれからの行動の仕方について、保護者の皆様にお知らせするものです。道徳の授業では、必ず話し合いの場を設けています。他の子の意見を聞いて、授業の前と後で考えに変化の生まれる子もいますし、逆に自分の考えをより深める子もいます。本校の取組についてご理解いただき、お子さんの考え方や実践の仕方について、親子で話し合う機会にならばと思います。(中略).....中身を読んでいただき、本読みカードのようにサイン(印でも可)をお願いします。子どもへの励ましや読んだ感想などを添えていただけるようでしたら、ぜひお願いします。

(保護者向け文書より抜粋)

- ・今まで手を挙げて発言することが少なかったと思っていましたが、今回はちゃんと手を挙げて発言したとうれしそうに話していました。ノートを見るとしっかりと自分の考えをもっていたのでしっかりとできてきたなあと感じました。(6年保護者)
- ・お手伝い=おこづかいのページを見て、次回から「このお手伝い、お金もらえる？」と聞かれないことを期待したいと思います。家では何もせずにお金を渡すのは...と思い、自分の欲しい物は家の仕事をしておこづかいで買いなさいという感じでしたが、そうなるとお手伝い=お金だったので、それもどうかと考えていたところにこの授業!!私たちが言うよりも授業で、自分で考えた方がきっといいと思うので。お手伝いに対して今までと少しでも違う感覚が生まれてくれたらいいなと思いました。(4年保護者)
- ・どうぶにとしょかんへいったとき、「しずかにする。おおごえではなさない」というきまりややくそくをきいていたね。しっかりとまもっていたのは、がっこうでまなんだことがじっせんでできていたんだね。(1年保護者)

② 地域に生活する外部講師の活用

5の研究計画の中で示したとおり、地域に生活する外部講師を数名招いた。子どもに考えさせたい内容項目を意識して授業を設定した。

★3年生 視覚障がい者への理解とガイドヘルプ

「親切・思いやり」「よりよく生きる」

- ・視覚障がいがあっても、スポーツを楽しんだり、自分の可能性に挑戦したりする方の話を聞いて、自分のもっているもの(個性)を大切に生きていきたいという思いをもった。また、視覚障がい者の援助の仕方を実習し、助けることの難しさを実感した。



★4年生 医師による命の話

「生命の尊さ」「感謝」

- ・ふだん検診でお世話になっている学校医から、人間は死んだら二度と生き返らないことや生まれる前から大切にされてきた命をこれからは自分で守っていくことを話していただいた。



★6年生 地域活性化に取り組む思い

「勤労・公共の精神」

- ・学区の夏まつりの創設に関わったまちづくり協議会長から地域への思いを聞いた。新しく住民となった人たちが地域に愛着をもてるように小学校の運動場で祭りを開く意義を話された。夏まつりには6年生もクラス2店ずつ店を出して参加し、地域住民との交流を図った。



読み物教材だけでなく、実在する地域の方の生の話は、子どもの興味を引いた。今後は、子どもの学びをより充実させるため、さらに幅広い人材が活用できるよう、地域の外部講師を活用する計画を立てていきたい。

7 研究を支える取組

道徳教育推進教師が、職員朝礼や職員会議等の短い時間を使って、行事があるごとにその行事で育てることができる道徳内容項目について全職員に話をします。日々の学校生活の中で、教師が何を意図して指導しているのか、子どもたちの活動をどのように価値付けるのかを知らせている。学校の全ての教育活動において道徳教育を意識して行うように教師に働きかけ、その話を聞く側も正面から受け止め、それぞれの持ち味を生かして子どもの指導にあたっている。

また、道徳教育推進教師が不定期で発行している「道徳だより」も教師の指導の参考になっている。

8 研究の評価

(1) 研究の成果

6月と1月に行った道徳意識調査の結果、「道徳科は好きだ」の質問に対し、肯定的な回答をしたのは6月約75%、1月約78%となり、大きな変化はなかった。「道徳科では他の人の考えを聞きながら、自分のことについてよく考える」の質問でも肯定的な回答が若干増えた（6月78.8%→1月80.2%）ものの顕著な伸びは見られなかった。どちらも低学年ほど「そう思う」が多くなった反面、高学年は「そう思う」の回答が「どちらかといえばそう思う」へ動いていた。これらの結果から、低学年は道徳の授業を楽しく学ぶことのできる時間だという認識が高まったと言える。高学年では、成長する過程で自分を客観的に自己評価して見つめ直すことができるようになったことで、評価が厳しくなったと予想した。「道徳科で学習したことはためになると思う」の質問については、全学年で肯定的な回答が増加しており、道徳科が自分たちに必要なものだという認識が高まったことが分かる。子どもにとって、道徳科での学びが彼らの成長につながっていると考えられる。

また、今回の研究を通して、最も成果があったのは、教師の道徳科の授業に対する意識である。鈴木健二先生の指導による「授業づくりアイデアシート」や、「翼話し合いチャート」を用いる中で、教師同士が多様な視点をもって関わることができた。教材を深く読み込むことや何をねらって授業をするのか等、授業をする者として道徳科に限らず大事なことを改めて学ぶことができた。授業者が一人で授業をつくるのではなく、みんなで子どもが成長できるようによりよい授業を考えるのだという意識が高まった。教師の挑戦が子どもたちの学びを変えていくことを実感できた。

(2) 今後の課題

子どもが、自分の考えを話したり友達の意見を聞いたりする力はついてきたが、どんなやりとりが展開されれば発達段階に応じた話し合いとなるのか、全員参加の授業とはどんなものか、さらに研究を深めていきたい。

また、「道徳ノート」に書かれた子どもの振り返りを教師が評価する上でどのように生かしていくのか、どんなことを振り返りさせていくとよいのかというところまで深く追究することができなかつた。通知表での評価も含めてどのように行っていくのか、改めて見直していく必要がある。今後も子どもが自分の気持ちや考えを授業の中で素直に表現し、互いに考えを深め合っていける実践をしていきたい。

